

以上が私の論文の要旨であるが、時間的制限がなければ更に広く深く追求し、即ち各地域の環境を調査し、そして本県に於いては集落の時代的変遷がいかなる作用に伴ったものかを、具体的に明確に実証してみたい。

静岡市東南部の地形と土地利用

—— 安倍川左岸低地と有度山丘陵西部 ——

日 月 邦 子

調査地域は静岡県の安倍川左岸低地と有度山丘陵の西半で行政上は静岡市に属する。低地は安倍川の沖積平野である静岡平野の一部で東海直線以南の安倍川を西の境界とし丘陵では作業の便宜上は中央を通る水系を境にした。

本論文は第一章調査地域概説でまず調査地域を示し、自然、人文環境を第二章、第三章の前提として概説的に述べた。第二章地形では、地形分類の方法とその結果について述べ、地形に関して2,3の考察を加えた。最後の第三章土地利用では、土地利用図をもとに、その現況を地形面との関係から述べ、次に農業を地区別に、主として統計を用いて更に作物別に現状と今後の見通しなどについて述べた。そして最後に調査地域が東海地方の一地域として、どのような性格を有するかを述べて土地利用のまとめとした。

次に第二章、第三章の内容を簡単に述べる。

第二章地形：地形分類は、2万5千分の1の地形図「静岡市東南部」を基図に、4万分の1の空中写真を用いて予備的な分類をし、後の現地調査で完成した。調査地域の地形は、丘陵地、低地、海岸平地の三地区から成り、地形分類の結果は表に示した通りである。

表 地形分類（付、地形分類図）

- Ⅰ、丘陵地地形 侵蝕平坦面
 - 上位台地面（日本平面）
 - 下位台地面（国吉田面）
 - 急傾斜面
 - 河成堆積面（谷底平野、扇状地）
 - 海蝕崖
 - 崩壊地
- Ⅱ、低地地形 自然堤防
 - 堤間低地（後背湿地を含む）

埋立地

Ⅳ 海岸平地地形 砂丘 砂浜

丘陵地地形は、概して地質との関係が特に顕著である。侵蝕平坦面は、久能山礫層から成り、面の形成は最も古い。上位台地面は小鹿礫層から成り、日本平と麓に分れて分布している。その形状は、山頂の方を頂点とする三角形で、海岸に対して逆傾斜している。面の傾斜は緩がで、表面には *black* があり、礫層の風化土壌と思われる明茶褐色の *loam* がみられる。下位台地面は、上位台地面より一段低く、20~40mの差をもって国吉田から西北方に分布している。ホーリントによる構成物質は一定していない。又、丘陵内には南北方向に谷底平野が発達しており、丘陵内の河川はいずれも平野への出口に扇状地を形成し、丘陵をとりまくように合流扇状地が発達している。この両者を合せて河成堆積面とした。丘陵南側の急崖の部分では、海蝕崖、崩壊地を分類に加えた。

低地地形：静岡駅付近から東、東南、南の3方向に自然堤防がよく発達しており、扇河道よりのもの程発達が良い。堤防間は後背湿地と考えられるが石田南方の砂丘の後背湿地はその構成物質から *lagoon* の埋積された地形と考えられる。又、原地形面の保たれていない部分は埋立地として區別した。

海岸平地地形：平野前面には、一列の小規模な砂丘がみられ、その前面には海岸沿いに砂浜が続いている。

次に、丘陵の地形面形成については、まずドーム状構造の地形が開析をうける場合には麓部に生じた放射状の必従谷が頭部侵蝕によって生長し、開析が進む。有漢山の場合、中核部には小鹿礫層の下に草薙泥層が分布しており泥層と礫層の間に差別侵蝕が行われ、この部分では同時に側方侵蝕も進んだ。この結果山頂付近と麓に台地面が分れて分布し、侵蝕平坦面も形成された。又、上位、下位台地面は堆積面が単にドーム状隆起によってのみ形成されたとは考え難く、面的な侵蝕をうけていると考える。又後者は、構成物質が一定していない点などから、扇状地性の堆積面ではないかと考える。そして、谷底平野の発達の違いは、ドーム状隆起という隆起形態に原因するのかもしれない。

平野は登呂遺跡の発掘によって形成が新しいことが分る。山麓線の状態から形成に先立って海が進入して湾を作っていたが、次に砂丘が前面に形成され潟湖化し、次いで安倍川、藻科川などにより埋積された。そしてその過程において自然堤防と後背湿地が形成されたのであろう。

第三章土地利用：調査地域の土地利用は都市的土地利用と農業土地利用に大別される。静岡市は同心円状に東海道以南に発展しており、市街地に隣接する地区は市の郊外としての性格を有する。工業的土地利用は清水地区程度まではない。

一方、農業土地利用は、調査地域の土地利用として最も重要である。初期の形態は、自然条件に適応した形であったが、次第に社会的、経済的条件等に作用されて今日見るに至ったと考える。農業は概して多角的、美的である。且つ、主観自給的ではあるが、気候、交通に恵まれ、蔬菜は栽培品種が多く、苺をはじめ促成果菜類、茶、果樹などの純高産作物の栽培が特に盛んに行われている。又能地区をはじめとするこの地域は、典型的な遠郊農村といえる。しかし、最近市街地の拡張によって耕地が減少し経営規模は零細化しているが、静岡、清水両市の近郊農村として、又京浜地区の遠郊農村として、更に経営が合理化されることが望まれる。

柿岡盆地西部の地形と土地利用

戸 嶋 多 恵 子

ある地域を理解する為には、その地域の自然及び文化の各要素を考察し、究極的には各要素あるいは要素群の綜合の過程を経て、地域性の綜合的把握にまで至ることが必要である。

この論文では、地域の自然的要素として最も重要で、基本的なものの一つである地形とその地形からみた土地利用を中心にして、そこから地域性の把握を試みた。この論文で取り上げた地域は、茨城県筑波山東麓に位置する柿岡盆地である。

X X X X

この盆地は、山麓線が不規則な形状を示すこと、盆地内部に扇状地が無く又扇状地性の堆積物もみられないことなど、現在の地形から推定すると、明らかに侵蝕盆地 (*Ausräumungsbecken*) の特性を有した盆地であるということが先ず云える。

又、西縁、北東縁の山地山麓部に緩傾斜の *granite* よりなる侵蝕面が発達している。この侵蝕面は *granite* の岩盤の上に *granite* の風化層を *matrix* とする *granite* の歪角礫層をのせている。又、この侵蝕面は、地質上の関係が密接で *granite* の山地に限って分布する。このことから地質が侵蝕面形成の一要因となっていることが推察できる。この侵蝕面は高度